



飛鶴の森林から

発行日
2014年2月28日 第84号
林野庁 北海道森林管理局
釧路湿原森林ふれあい推進センター

釧路湿原自然再生
協議会を主催

協議会を主催

自然再生・生物多様性の保全

2月10日(月)、釧路市内で、個人、関係団体及び関係行政機関が参加して、第19回釧路湿原自然再生協議会が開催されました。

この協議会は「自然再生推進法」(平成14年12月11日法律第148号)に基づき、平成15年11月に発足したもので、釧路湿原とその流域で実施されている、湿原再生、旧川復元、土砂流入対策、水循環、森林再生及び再生普及の取組みについて、討議されています。

議題の主なもの、本年度開催された各小委員会での議論内容の報告で、当センターは森林再生小委員会についての報告の中で、雷別地区自然再生事業計画書作成後5年間の事業実施内容の点検及び雷別地区自然再生事業の実施状況についての議論の内容を報告しました。

また、釧路湿原全体構想が策定されて来年3月で10年目を迎え、見直しの作業に入る時期を迎えることから、このためのワーキンググループを立ち上げることが提案され、了承されました。これを受けて、協議会終了後、直ちに第1回釧路湿原全体構想見直しワーキンググループが開催され、どのような手法により見直しを行うのか検討されました。

自然再生・生物多様性の保全

釧路湿原自然再生協議会再生普及委員会
再生普及委員会
ワーキンググループ

2月5日(水)、第12回フィールドワークショップ「厳寒のヨシ湿原を歩く」シラルトロエトリ川」が開催され、当センターはその上流で行っている雷別自然再生事業について説明しました。

開催日前に暖かい日が続く、川を渡ることで、川沿いを遡上することとなりましたが、案内人の新庄久志先生(環境ファシリテーター)の分かりやすく爽やかな語り口に参加者は静かに耳を傾けていました。例えば、「人間の手が入って土砂が貯まったところの樹木は密生して真っ直ぐ伸び、都会の高層ビル、元々の自然が残っているところは背が低く、幹や枝が広がって郊外の一軒家。」といった説明。フィールドワークシヨップは来年も開催しますので、<http://heco-spc.or.jp/kushiro/category/news/> を「注目下さ」。

融けてしまった川



タンチョウの足跡



第5回 雷別ドングリ倶楽部を開催

自然再生・生物多様性の保全

2月19日(水)、当ふれあいセンター庁舎前で、会員16名の参加を得て、本年度最後の「雷別ドングリ倶楽部」を開催しました。

始めに、次年度の活動予定及び活動内容について意見交換。雷別の自然再生事業地が激しいエゾシカによる食害と降雨による土砂の流出が発生していることから、当センターから防鹿柵の設置と現地のササを利用し、束ねて表流水の勢いを弱めるための粗朶束(そだたば)の設置を提案。「会員は高齢な方や女性を中心なので実施に不安があることとなりました。」との意見が出されたので、事前に試行することとなりました。

その後、庁舎前庭に場所を移し、ミズナラ、シナノキ等の冬芽の観察会を実施しました。当日は随分と冷込み、寒さが厳しい中での観察会となりましたが、会員はメモを取るなど耳を傾けていました。

ヤチダモの説明



シヤクナゲには大きな花芽が



「雷別ドングリ倶楽部」会員募集

「雷別ドングリ倶楽部」では、自然再生をボランティアで行う会員を随時、募集しています。年会費等は不要ですが、活動するに当たり、傷害保険へご加入いただくため、その費用が必要となります。詳細は、当ふれあいセンターまで、お問合せ下さい。

この日は休日を利用して、弟子屈町のアトサヌプリを訪れることとしました。釧路から国道391号を北上。非常に天気が良かったので予定を変更し、摩周湖に立ち寄ることとしました。

しかし、摩周湖に近づくにつれて天気が悪化。なんとか、摩周湖が見える状態でした。摩周湖とその周辺の森林は、根釧西部森林管理署が管轄する国有林です。

展望は今一歩でしたが、美しい花々が出てきてくれました。特に、ウラジロタデ（雌花）は、名前から想像がつかない程美しく、感動しました。一方、こんなところにも国外の外来種が。フランスギクは、あちこちで群落を作っていました。東洋系の外国人観光客が、沢山訪れていましたが、これらの花を見て「マシユウコ、ワンダフル！」と思われたくないものです。

次に、アトサヌプリの情報を得るために「川湯エコミュージアムセンター」へ。沢山のシナノキ(科の木、又は木偏に品)が開花し、とても爽やかな香りがセンター周辺を包んでいました。



▽ 摩周湖 (第1展望台)



▽ ウラジロタデ (雌花)



▽ フランスギクとセイヨウノコギリソウ



▽ シナノキの花



▽ アトサヌプリ (硫黄山)

さて、いよいよアトサヌプリです。樹木に囲まれたカーブを曲がると、蒸気をあちこちで吹き上げる、大きな山容が突然現れました。これも国有林です。ここは土地の酸度が高く、植生は限られた樹種で構成されています。特に、こんな低い標高(150m程度)で、ハイマツが見られるとは驚異的です。以前、南アルプスの光岳(てかりだけ)に、世界最南端のハイマツ群落を見に行ったことがあります。そこは標高2000mをはるかに超える高さでした。アトサヌプリと言え、明治時代の硫黄採掘を巡る悲惨な囚人労働について、語らずにはいられません。当時、硫黄は火薬の原料のほか、世界的な化学工業の進展で需要が高まり、石炭とともに北海道の重要な鉱物資源として、明治初期には、米国向けの花形輸出品でした。

この山に、経済的価値を見いだしたのは、釧路で漁場持(ぎよばもち)をしていた佐野孫右衛門(四代目)。明治9年に開拓使に借区願を出し、15カ年の借区が認められました。明治13年に病気で引退。経営は実弟の儀十郎(五代目孫右衛門)に引き継がれましたが翌年死去。その後、佐野家の代理として、釧路で回漕業を営む西川幸右衛門が経営した後、明治18年に硫黄山の権利は、函館で銀行業を営む山田慎に移りました。山田は、明治18年に標茶に開庁した、釧路集治監(しゅうじかん)の囚徒を、安い賃金で豊富に利用することを考え、囚徒の貸下げを集治監に申請。集治監は外役(外での仕事)のできない積雪期の作業として認可し、山田との間で10年間の雇役契約を締結。さらに、根室県令に「鉱物運搬用鉄道敷設願」を提出して、15年間の無償借地が認められ、釧路の春鳥炭山の採掘権も手に入れて、鉄道の燃料も確保。ところが、山田の経営する銀行がうまく行かず、採掘は財閥の創始者Yと契約のうえ共同事業とし、Yは積極的に投資。明治20年には、人夫300名と囚徒300名で、僅か数ヶ月で、標茶から跡佐登までの鉄道本線と、途中から旧精錬所に至るまでの支線が完成。これが、北海道で2番目の鉄道となりました。



国民の森林・国有林

釧路湿原森林ふれあい推進センター

〒085-0825 北海道釧路市千歳町6番11

【IP】050-3160-5787 【TEL】0154-44-0533 【FAX】0154-41-7305

【E-mail】h_kusiro_f@rinya.maff.go.jp

【URL】http://www.rinya.maff.go.jp/hokkaido/kusiro_fc/index.html